

## 能登人と創る新たな能登 ー学生を媒介とした新規体験プログラム開発と継承に関する試みー

学生団体名 能登地域塾（金沢大学）

参加学生 大平一貴、川端浩泰、河本愛、杉本晴一、中村瀬奈、林沙歩、松岡稔明、村上純一郎

協力団体 能登定住・交流機構

### 1. 地域活動の概要

目的「学生と能登人が交流することを通じて、相互に学び触発しあう関係を構築する」

学生が協力団体と合同で、地域で活躍している若手をたずね、「新規体験プログラム」を企画立案する。体験プログラムを立案し、「モニターツアー」を行うことで、学生は、地元にお金を落とすという成果を達成し、地域の方は新たなビジネスモデルの創出に対し気づきを得た。

### 2. 地域活動の具体的内容

メインテーマは新規体験プログラムの発見とモニターツアーを実施すること

#### I. 魅力発見（5月～9月頃まで）

前年度から継続して連携している能登定住・交流機構とともに地域固有の、これまでは発見されていなかった資源の発見のために能登への訪問を行った。訪問先としては、能登地域で活躍している若手をたずね交流を続けた。

#### II. テーマ選定（9月）

今年度は、能登町に焦点を当て、宇出津にある「ふくべ鍛冶」と小木にある「和平商店」に協力の旨を伝え、「イカさき包丁づくり体験」と「イカさばき教室」という体験型ツアーをプログラムとして選定した。

#### III. 計画策定（10月）

一般参加者が見込めるように、能登地域の宿泊施設に対しての「現地聞き取り調査」、参加者募集のための「広報」、ツアーそのものの「枠組みづくり」という3つの要素に分けて段階を経て進めていくことを決定した。

#### IV. 調査、調整（10月～1月）

「現地聞き取り調査」…七尾市の多田屋、能登町のラブロ恋路、能登やなぎだ荘を訪問し、ツアー実施時期の観光客の動向、ツアーそのものに需要があるか等について聞き取りを行った。

「広報」…HPの作成やFacebook等デジタル媒体を用いながらの集客と、チラシ作製によるアナログ方式の集客を両立し、広報活動を行った。

「枠組みづくり」…能登定住・交流機構の協力のもと、ツアー実施のため、参加受付の窓口、HPでの情報発信、保険などの各種調整。また、今後地域が主体となってツアーを行ってもらうための話し合いを中心に行った。

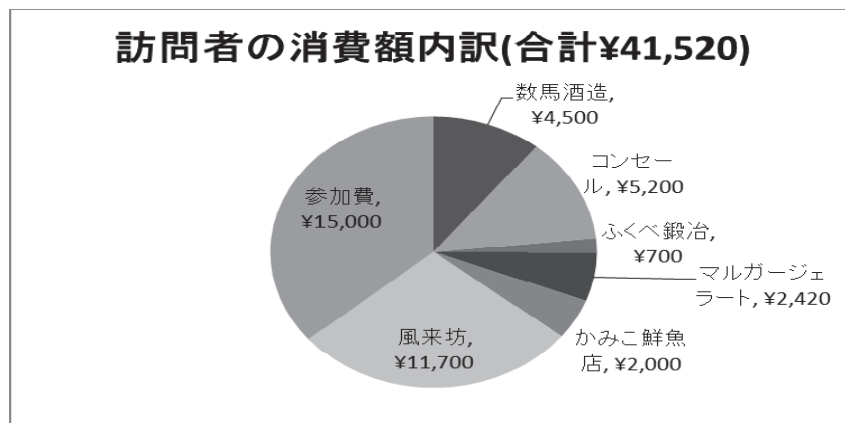
#### V. モニターツアーの実施（1月）

1月17日（土）モニターツアーの実施。参加者は金沢大学の学生5名。ツアーの参加料は1人3,000円で行った。

(当日の行程)

8:30	10:30	13:10	14:00	15:00	16:00	19:00
ふくべ鍛 冶へ移動 (集合イ オン杜の 里)	包丁づくり体験 (見学、包丁研ぎ・名前 彫体験)	昼食 (風来 坊)	数馬酒造見 学	かみこ 鮮魚店、 コンセ ール能 登	帰宅 (マルガージェ ラートに立ち 寄る)	解散 (イ オン 杜の 里)

(当日、訪問者が消費した金額)



1人あたりが今回使ったお金=41,520÷8(ツアー参加者、能登地域塾参加者)=5,190円

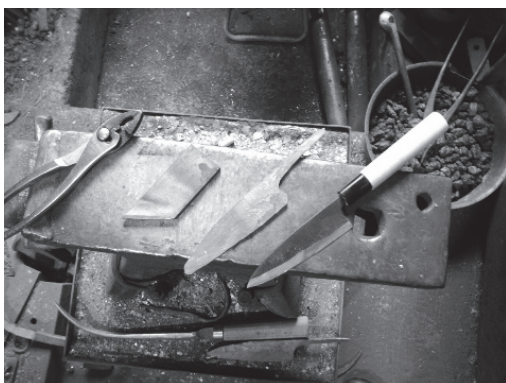
(体験の様子)



包丁の成形を行っている様子



成形された包丁を研ぐ体験をしている様子



左から包丁の原型、焼きを入れたもの、完成したもの



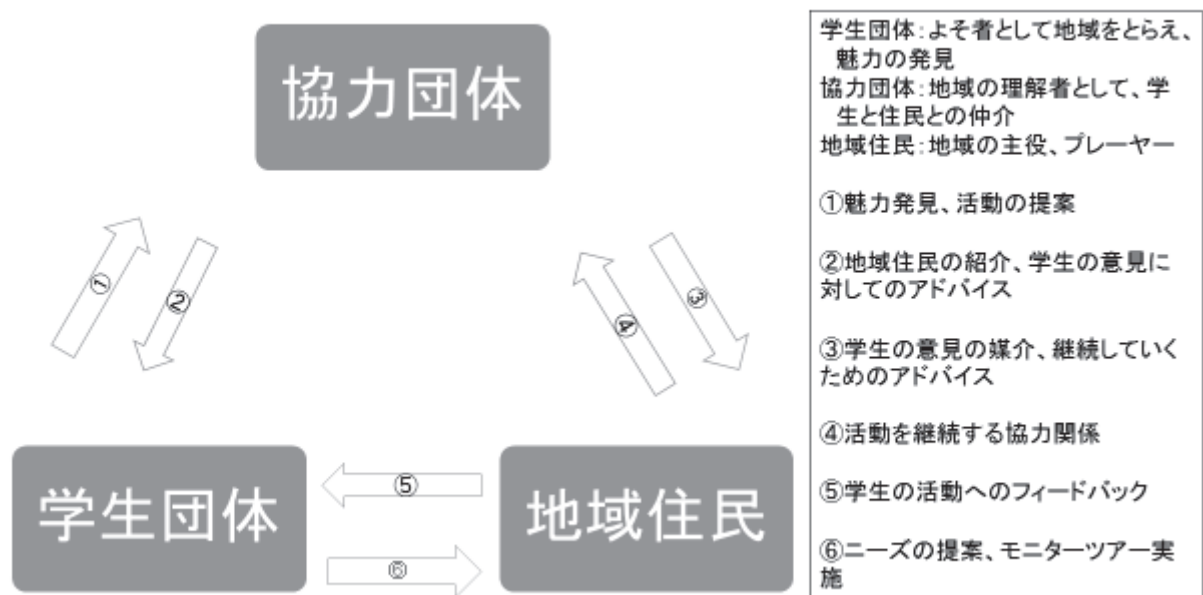
最後に包丁に名前を彫る体験を教わる様子

### 3. 地域活動の成果

今年度、実際に地域の方と能登定住・交流機構と協力して行った体験ツアーについて、計画の段階から、最終的には学生の介入なしに地元の方が主体となる、着地型の体験プログラムを作ること心掛けて活動を行った。ツアープログラムには荒削りな点も多いが、実際にモニターツアーを行ったことで地域の方にも、外部者を受け入れていくことについて、今後の継続展開をよりイメージしやすくなったと考えられる。このような「気づき」の機会を提供できたことに、この活動の意義を感じている。あくまでも能登地域での主役は地元事業主の方なので、学生が成果を得るだけでなく、地元の方々に貢献できたことは、今後につながる大きな成果だと認識している。

また、多くの学生の地域活動は、各種補助金や地元の方々のご厚意に財源的支援を頂いている物が多い。しかしながら、今回のモニターツアーをでは、参加学生一人あたり 5,000 円を越える金額を「地元に落とす」ことで、小さいながらも経済効果を生み出すことが出来た。仮に、同等のツアーを月 2 回程度実施することができれば、年間で 24 回、金額にして 100 万円前後の規模の活動になる。広報手段、参加受入人数、実施頻度等を検討・改善していけば、収益性の向上にも見込みがある。

今年度の活動は、学生側と事業をする地域の方との間に能登定住・交流機構というコーディネート団体が入ることによってツアーの実施にこぎつけることが出来た。学生はニーズの発見やそのニーズの検証などをスピード感と学生なりの感性をもって進めた。地域の方は、新しいことをしたくても、日常業務に追われ、固定した発想になりやすく、新規の活動に割く時間は乏しい。そこに地域の実情をよく知るコーディネート団体が入ることによって、学生と地元との両者の特性を活かし、活動を結びつける役割を担ってもらった。各々が違う役割を、その個性を活かしながら進めていくことで成功したと理解している。学生が地域に入り活動するモデルを以下のような形で示すことができるのではないかな。



### 4. 来年度の地域活動計画

能登地域に関しては金沢からの物理的な距離もあり、学生が継続的に活動を行っていても地域社会でその効果が表れるのにタイムラグが生じる。そこを考慮するのであれば、地域に住み込むインターンシ

ップでもない本活動においては、学生、地域の人、協力団体の役割、特性をそれぞれ活かすことのできる活動になり得たと言えるだろう。

しかし、本活動においては、広報による集客の難しさ、どのようにして人を呼び込むのかという点で大きな課題が残った。参加してもらった5名はいずれも金沢大学内の同研究室の学生で、チラシを見て参加に至ったので、どのようにより多くの人にこういった体験プログラムがあるということを知ってもらうのかについて、考えることが必要だと感じた。

## 5. 学生の感想

(モニターツアーを通じて)

一つの体験プログラムを商品化することの難しさと今回のことが地域への活力につながったという手応えを得ることができた。ツアーの事前準備の中で、学生が一般客を集客することの難しさを感じたが、今まで能登にあまり来たことのなかった学生に興味を持ってもらうことができてよかった。こうした体験プログラムを最終的に学生がいなくても持続可能なものにしていくためには、地域の主体性や地域活性を行っている事業、行政との連携が必要になってくるのではないかと感じた。

(活動を通しての感想)

能登地域塾という活動を通して、短期間にこんなにも能登という土地を訪れたということに驚きを感じた。そして、訪れるたびに少しでも変化のある人たちにも驚きを感じ、同時に期待を感じた。その中で、小さなモデルを作り、今後の継続に向けた方向性を示したことに意味を感じたい。

私たちができたことというものは大きなものではないかもしれないが、能登地域にはさまざまな方面で活躍されている方は多い。よりよくできるエッセンスを十分に持っている土地だと思った。彼らはその集落の中では親密な関係にあるので、成功したと感じる人を一人でも多くすれば、地域を盛り上げようとする意識が浸透していくのではないかと感じた。よって、学生は今後も能登地域で活動をしていくと思うが、より地域を理解しようと意識して取り組んでいく必要を感じる活動になった。

## 6. 地域活動に対する地域からの評価

能登地域塾の最大の成果は、「ふくべ鍛冶」の後継者が明確になったことである。初年度においても、地域の若者たちとの交流会を準備してくれていた干場健太朗さん（町役場勤務）が、3月末で退職し、お父様の後を継ぐ決意をしたと、体験ツアーの際にうかがった。学生諸君との対話の中で、彼自身が仕事の魅力や価値について語り、学生たちからも新たな商品開発の提案をしてきたことが一つの契機になっているのではないと思う。一方でお母様が最近亡くなり、店を切り盛りする役割を担う必要もあったのかも知れないが、健太朗さんの奥様も、学生諸君との活動がよい刺激になっており、新たな商品開発に意欲を示しておられました。今後も学生の皆さんが、ふくべ鍛冶に関わって下さることを期待したい。このような活動が他の商店や地域住民にもよい刺激となることを目指して、継続的に活動を続けていただければと思う。（能登定住・交流機構 高峰様）

実際に作っている工程を消費者に見てもらえること、工程を分かってもらえることは自分たちにとっても嬉しい。今後本格的な体験メニューとし取り入れていきたいと思います。また、学生さんたちにはほかにも新たな商品の提案をしてもらいたいと思います。（ふくべ鍛冶 干場様）